＜幼児教育＞

生き物との関わりから生まれる思考と心の動き

～生き物を大切にしたいと思える心の育ち～

岐阜市立加納幼稚園　教諭　小島　崇徳

＜概要＞

本研究は、幼稚園教育要領の「自然との関わり・生命尊重」から生き物との関わりを通して生命の不思議さや尊さに気付き、生き物を大切にする心の育ちを願い、このような研究主題とした。自然や生き物と関わることが減少した近年だが、園の環境として飼育環境を整えたり、散歩に出かけたりすることで、意識的に自然との関わりを増やし、多くの学びや経験をすることができた。

そのなかで、生き物を大切にしたい気持ちが育つには、変態していく同一個体を継続して観察することが必要だと考え、園庭に生まれたチョウのたまごから成虫になるまでを観察した。また、子ども自身が興味をもった生き物について考え、飼育していくことで大切にしたいと気持ちが育つと考え、川に住む魚を捕獲し、飼育を行った。観察過程で子どもの思いや気付き、工夫が生まれ、死に直面した時にはより深く考え、死なせないためにはどうするとよいのかを思考・試行し、大切にしたい思いの育ちが見られたため、その過程を省察としてまとめたものである。

１　研究主題について

（１）生き物を大切にしたいと思える心とは

①幼稚園教育要領より

自然との関わり・生命尊重

「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。」

このように書かれていることから、自然や生き物との関わりを通して多くのことを学び、経験することで理解し、思考する姿を願い、研修主題とした。

②本園の実態

近年、子ども達が生活の中で自然と関わることのできる場や、身近な生き物と関わる場が減少してきており、自然や生き物に触れて感動体験が出来る機会が少なくなっている。しかし、本園では意図的に草花・野菜などをプランターや花壇で栽培したり、園庭にある思い出の森（小高い林の名称）で、遊びが広がる環境を用意したりしてきた。そうすることで、草花を使った色水遊びで草花の色に合わせたジュース作りをしたり、夏野菜の生長を日々観察し、収穫した野菜を食べることで、苦手だった野菜も美味しいと感じることができたり、思い出の森では木漏れ日の中、草木が風で揺れる音を聞きながらダンゴムを探したり、木の枝を片手に探検、冒険などのイメージをもってごっこ遊びを楽しんだり、自然と触れ合うことができている。また、近隣の公園や川へ散歩に出かけることで、園内とは違った自然を身近に感じ、そこに住む生き物たちへの興味をもつこともできている。

③教師の願い

ここまで書いたが、私は生き物を好きという気持ちはあまりもち合わせていない。虫や生き物に対して苦手意識をもっていたためである。しかし、今回の実践で子ども達と共に、チョウの卵から幼虫になる様子を観察し、４齢幼虫から５齢幼虫になる様子を見たり、羽化する瞬間を見たりする経験ができた。その様子を見てからそのチョウに対して、自分の中に「大切にしたい。大きく飛び立ってほしい。」という思いが生まれていることに気が付いた。他のチョウではなく、卵からずっと観察してきたそのチョウに対してだけ生まれた感情だ。どこかから飛んできたチョウを見ても特に大切と思うことはないが、あのチョウだけは私の中で特別な存在となった。

この経験から、同一の生き物と深く関わったり、自分の強い思いから生き物と関わったりすると、その個体について深く考えたり、調べたりしたくなり、関わりの深さや思いの深さに合わせて、大切にしたいという心の動きが生まれるのではないかと考えた。そして、子ども達にも同一の生き物と深く関わることのできる環境を通した心の動きについて読み解き、生き物を大切にしたいと思える心の育ちはどのように育まれるものなのかを研究したいと考えた。

（２）目指す子どもの姿

・興味をもった生き物について考え、その気付きを友達と共有する。
・生き物の変化を喜んだり悲しんだりする。

（３）研究の仮説

子ども自身が興味をもった生き物を、変態していく様子を含め、継続的に飼育し続けることで、気付きを友達と共有したり、変化を喜んだり悲しんだりするのではないか。

（４）研究内容

・変態する同一個体の生き物を継続して観察することで、変態ごとの興味関心の高まり、その様子を撮影動画で目の当たりにした時の、心をときめかせたり、不思議な姿に調べたくなったりする姿を捉えた事例の省察。
・幼稚園から近い清水川の生き物について友達同士で考えたり話し合ったりすることで、自分とは違う意見にふれたり、飼育過程での変化や気付きをクラスで共有したりした様子の省察。

（５）研究方法

・ドキュメンテーション・記録　（幼児理解）
・事例研　（多面的な視点）

（６）研究の取り組み

研究会にて検討した実践事例や学級通信等で取り上げた幼児の姿から、２事例を取り上げ、「子どもの興味関心の高まり」「子どもの気付き・試行錯誤」「教師の援助」として色分けをしてまとめた。

事例１「このたまごどうなるんだろう。」
子どもの興味関心の高まり　子どもの気付き・試行錯誤　教師の援助

４歳児クラスたんぽぽ組は男児６名女児６名の１２名クラスになる。内３人は児童発達支援事業所との並行通園のため、毎日の生活は多くて１１名で、お互いの遊びや興味が伝わりやすい環境にある。園庭には沢山の花が咲いており、A 児が園長先生とチョウが卵を産みつける瞬間に立ち会い、「この卵はどうなるんだろう」と疑問をもったことからチョウへ羽化するまでの観察が始まった。その日から幼虫が生まれるまで毎朝気にして見て、幼虫が生まれてからは減っていく葉っぱをみて「たくさん食べたね」「これがちょうちょうになるのかな？」と変化に疑問をもちながら様子を楽しみにすることができた。その姿が他の子にも伝わり、「目はどこかな？」「葉っぱから落ちないのかな？」などお互いに感じたことを話したり、喜びを共有したりする姿へと繋がっていった。

ある日、幼虫が緑色に変化したときには大騒ぎになった。「どこか行っちゃったのかな？」「緑の葉っぱを食べたから色が変わったんだよ！」「昨日と全然違うから、違うのがどっかから来たんじゃない？」など、それぞれが思ったことを話し合っている姿から、教師もどのように変化したのか見たいという思いに駆られ、動画での撮影に挑戦した。撮影は大成功で、４齢幼虫が５齢幼虫になるタイミング、蛹になる様子、羽化する様子も全て見ることができ、目の前にいる幼虫の変化を動画を通してみることで、より興味をもって見守ることへと繋がっているようであった。そしていよいよチョウになった虫かごを観察しているときに、羽化した成虫をどうするか問題が発生した。狭い虫かごをバタバタと音を立てながら飛ぼうとする姿を見て、ここまで育ってきて嬉しい反面、可哀想という思いも生まれ、どうしたいのかを考える場面が生まれた。

図１　チョウの観察

初めは「逃がしてあげたい」「逃がしたくない」の言葉だけの言い合いであったため、どうして逃がしてあげたいのか、どうして逃がしたくないの

かを聞いていくと、

図２　逃がすか飼うか

主にこのような意見があがってきた。その後、逃がしたい派と逃がしたくない派に分かれて、それぞれ理由を伝え合うことで、お互いの気持ちを知り、どうしていくのかを考える機会ができた。話し合いの中で、狭くないところ、エサのあるところなら元気に飛び回れるのではないかということでまとまり、その条件を満たせるものをみんなで探しにいくことにした。そして、事前に用意しておいた一辺が 30 ㎝、高さ 180 ㎝程の三角柱の網を子ども達と発見し、これなら条件を満たしていると、子ども達も納得してこの中で飼うことになった。逃がしたいと言っていた子ども達も、本当は飼いたい思いはもっていたようで、“そんな条件のものがあるなら…”と嬉しそうに一緒に探す姿があり、話し合い、思いを出し合って考えることの大切さを感じた。

戸外では、どんな花ならいいかを考えると「真ん中がある花ならいいんじゃない？」「真ん中のある花ってどれ？」「これかな？」といろいろな花を捜し歩くうちに、「あっ！ちょうちょうがいる！お花吸ってるよ！」と花壇の花の上に、三角柱の網を設置することが決まった。

しかし、数日後にはそのチョウは居なくなっており、「なんでかな？」「下から逃げたのかな？」ということで戸外ではなく、次に羽化してくるチョウは部屋に移動して下から出られないようにした。子どもの気付きに合わせて環境を整えることで、継続的にチョウについて考えたり工夫したりすることができたように思った。

しかし、次の月曜日には固まって動かなくなっているチョウを見つけた。そのチョウを見て「寝てるだけじゃない？」「違うよ、全然動かないから死んじゃったんだよ！」「なんでだろう」と死んでしまい、悲しい気持ちから、死んでしまった理由を考える姿がでてきた。

この死んでしまったチョウをどうするか考えると

「外にお墓作って埋めてあげる。」
「それだとアリに食べられちゃって可哀想だよ！」
「じゃあどうすればいいの？」
「アリに食べられない所に埋める。」
「そうだ！部屋の中にしたらアリ来ないんじゃない？」
「部屋の中に埋めるところないよ。」
「じゃあ、この中（チョウのために用意していた花のバケツ）に砂入れて、そこをお墓にするのはどう？」
「いいね！それならアリに食べられないし、お墓もできるね！」

というやり取りが起こり、バケツの中に死んでしまったチョウを埋めて、「ちょうのおはかさわらないでね。」と表示を作って、手を合わせて拝む姿がみられた。

省察

一人の心のときめきから始まったチョウのたまごの観察から、興味関心がクラス全体へ徐々に広がっていき、幼虫の成長による変化ごとに気付きや試行錯誤、対話が生まれていった。また、成長過程での変化に対する興味・関心・疑問から、「調べたい」「知りたい」意欲の育ち、友達との意見の対比の中で、自らの意見を伝え合う経験から折り合いをつけ受け入れる心の育ち、大切に育ててきた生き物の命の最期に立ち合い、死への寂しさの経験、死という結果から思考して、どうするとよかったのかを試行する経験など、生き物が成長し、変化していく喜びの感動体験から、最期の別れの悲しい体験までを全て通して経験することで、命のすばらしさと、死という悲しい出来事を繋げて考えることが、少しはできたのではないかと思う。

もちろん、クラスの全員が同じ熱量で命について考えられたわけではなく、皆が集まって覗いているから気になって見ていただけの子どももいる。死んでいる様子を寂しそうに見ていても、「死んじゃった。」と寂しい気持ちを抱いているというくらいの子どももいる。一人一人の読み取りでは、それぞれの生き物との関わりや触れ合い方、生活を共にすることで、一人一人が感じる内容が違っており、それぞれの子どもの思いなりの関わり方を

していた。時差がある子どももいれば、三角柱の網を叩いて飛ぶ様子を見たい思いで、他の子どもが可哀想だと思う関わり方の子どももいる。あまり関心はないかもしれないが、お世話を忘れずにする子どもや名前を付けたことで急に身近に感じて様子が気になる子どもなど、それぞれの姿を認め、生き物と繋がっていけたらと思う。

それでも「なんで死んじゃったのかな？」「食べ物がなかったかな？」「一匹で寂しかったかな？」「暑かったのかな？」など、死という結果から思考するきっかけにはなり、死なせたくない思いは以前よりも育ってきていると感じる。また、同一個体を継続して観察してきたことで、成長過程を知り、感動体験を通して愛着の高まりを感じた。

教師の考えとして「チョウは羽化したら逃がす」という先入観をもっていたが、逃がすという選択だけでなく、子ども達とどうしていきたいかを一緒に考え、話し合ったことで、生まれた経験だと思う。目の前で死んでいる様子を見ることで、考えるきっかけができ、命の終わりを感じることができていた。今後、逃がす選択肢も出てくると思われるが、たんぽぽ組の子ども達にとっての「羽化したから逃がす」という選択の重さは違ってくるのではないかと思った。

事例２「いっぱい捕まえたい」

６月中旬に初夏の自然や生き物に触れるねらいで歩いて３０分もかからない清水川の散歩に出かけた。道中にはアジサイやシロサギ、チョウやトンボなどいろいろな植物、生き物がおり、その都度足を止めて歩いていった。いろいろな生き物がいる中、川の魚を覗き込むと、すくえば簡単に捕れそうなくらいたくさんの小さな魚が泳いでいることに気付いた。６月末には、その話を聞いた岐阜市教育委員会幼児教育課の先生が娘さんと清水川に行き、捕まえてきてくれた魚をプレゼントしてくれて、ミナミヌマエビやヨシノボリ、タモロコやギンブナなど、図鑑で調べて名前が分かると嬉しくなり、再び清水川で魚を捕りたいという気持ちになっていった。

７月に入り、子どもが入るのは危険もあるため、教師が代表して網で魚を捕ることになった。たくさん魚が泳いでいるため、大漁になると予想して川に入ったが、見た量の魚とは裏腹に魚たちは動きが早く賢いため、全く網に入らない。外から見ている子どもたちは「こっちだよ！」「すくって！」「ほら！ここ！！いっぱいいるよ！」と好きに言うも、動きが早く、全く取れなかった。子ども達はなかなか捕れない様子に早々に飽きてしまい、近くで遊び出す子もいる中、なんとか捕れたのは、草むらにひっそりと泳いでいた小さなメダカ数匹とその周辺にいたミナミヌマエビだけだった。

それらを持ち帰り、各クラスの水槽で飼っていると、名前を付けて呼び始めた。貰った魚よりも自分たちの目の前で捕まえた生き物の方が、気持ちが入るようで、エサやりの順番表を作ったり、名前の表示を作ったりして可愛がり始めた。しかし、３連休明けに幼稚園に行くと、ぷかぷか浮いている魚と真っ赤になって死んでいるエビがいた。

それを見て「寝てるのかな？」「動かないから死んでるんだよ。」と気が付いたことを話している子どももいた。色の変化や水質の変化に気が付いてほしい思いがあり、「エビってこんな色だったっけ？」と問いかけると、「うん、前から赤かったよ！」と教師の思いと違った答えが返ってきたため、以前の写真を見せると、「あれ！前はちょっと黒かったのに、真っ赤になってる！」と変化に気づくことができた。「みんなはどんな時に赤くなるかな？」と聞くと、「暑い時顔真っ赤になるよ。」と一人の子どもが言うと「そうか、エビも魚も暑かったんじゃない？」といい、水槽の水を触ってみた。「お風呂みたい。」「どうしよう。」と困っていたため、「みんなは暑い時どうする？」と問いかけると「お茶飲む」「アイス食べる」「クーラー付ける」とそれぞれの答えが出た頃にそれを聞いていた B 児が「氷入れて冷やしたらいいんじゃない？」と言うと、「そうしよう！」とまとまり、夏の間生き残っていた魚は氷で水温調節しながら過ごすことになった。

図３　清水川での取り組み

そんな一学期が終わり、全然捕まえられなかった清水川散歩を終えて教師が教材研究をしたところ、仕掛けをセットすると沢山の魚を捕まえられることが分かった。

９月に入ってすぐに、水槽に増えた魚を見せな

がら、仕掛けでたくさんの魚を捕まえたことを伝えると、仕掛けを作りたい思いが高まった。図鑑にあった絵を元に見よう見まねで作ったり、タブレットの動画を見ながら同じように作ったり、先に作った子どもが後から作る子どもに教えたりした。

餌についても初めはすでに飼っている魚のえさという子どもが多くいたが、みんなが好きな食べ物や美味しかった給食を問いかけるとなんでもいいんだという気持ちが高まり、自由に発言をし始めた。また、「家でもお家の人と一緒に考えてみてね。」と伝えると沢山の協力をいただくことができ、３０種類近くのエサが集まった。

図４　仕掛けや餌

当日の朝には、事前に一人一つ以上作った仕掛けに３０種類の中から自分で何を入れるか決めて、「(魚を) いっぱい捕まえたい！」と散歩に出かけた。すると、前回の教師が代表して川に入ったときとは全然違い、じっと自分の仕掛けを覗いたり、魚が集まってくる様子を喜んだりして１時間近く仕掛けの行く末を見守ることができた。一人一つ仕掛けを作ったことや、餌を自分で選んだことで、自分の仕掛けはどうなったか興味が湧き、ずっと楽しく見守ることができていたように思った。ある程度時間が経ってから仕掛けの中身を一つずつ見ていくと、まさかのチーズに魚が入っており、大盛り上がり！チーズをエサにした子は得意げに、「ほらね。」と、とても嬉しそうだった。

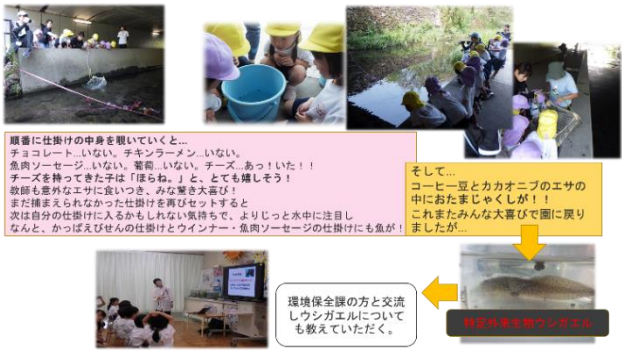

図５　ウシガエルについて

自分の仕掛けに入っていなかった子どももみんなで用意した仕掛けで魚が捕れたことが嬉しくて、バケツを覗き込んだ。そして、コーヒー豆とカカオニブの仕掛けにオタマジャクシが捕まっているのを見つけ、その時は大喜びをして、コーヒー豆で生き物が捕れた！と盛り上がっていたが、調べてみると特定外来生物ウシガエルのオタマジャクシだった。捕まえてすぐの時には、大半の子が「飼いたい！」「足が生えてきているよ！」「カエルになるのかな？」と今後の変化にわくわくした。しかし、危険生物であることが分かってから、オタマジャクシについて、クラスのみんなで集まって、子ども会議で何度も話をした。

捕まえた次の日に、子ども達には危険な生き物であったことを伝え、このオタマジャクシが大きくなると、沢山の魚や生き物を食べてしまう事、みんなも、いろいろな生き物を食べて生きている事、逃がすことはできないため、飼うとしたら死ぬまで面倒を見る必要がある事、危険な生物は他の生き物のために駆除される事などを教師から聞いた時には、「でも飼いたい！」「危険ならだめなんじゃない？」「逃がさないならいいんじゃない？」と、飼いたい気持ちの子どもの中に、飼ったらいけない生き物もいるのだ。という知識が入り、意見が分かれ始めた。そしてまた次の日には、環境保全課との交流があり、岐阜の川の生態や自然豊かな山や川がある事でいろんな生き物が元気に生きていることを教えていただいた。また、ウシガエルなどの外来生物がいることで、他の生き物が絶滅してしまう危険があることも教えてもらい、ウシガエルは飼ってはいけないことを話で聞いた時には「そんなに危険なら死んじゃったほうがいいかも。」「他の生き物が全部食べられちゃうから生きてたらだめ。」と、大半の子が駆除する意見になった。しかし、「でも死んじゃったらかわいそう。」「ずっとここ（別の水槽）に居るなら他の魚食べないよ。」という意見を言う子どもが数人いて…また次の日には話し始めは半分以上の子どもが「(他の魚や生き物のために) 生きてたらだめ。」という意見だったが、「死ぬまでは生きててほしい。」「死んじゃうのはかわいそう。飼いたい。」という意見の子が話始めると、徐々にその意見に感化されて、「やっぱり飼いたい。」という流れになっていった。

命について考えることはとても難しく、残酷なことだと感じた。オタマジャクシも悪ではなく、生きるための行為というだけ。日本に持ち込まれただけという事実の結果、駆除の対象になってし

まっているだけの生き物である。意見が揺れ動く子どもたちの気持ちもよく分かる。しかし、飼ってはいけないと国が定める程の危険生物であることも伝えていく必要があると思い、琵琶湖で何千匹のオタマジャクシを捕獲している動画、オイカワなどの在来種を守り、捕獲したオタマジャクシは飼っているカメのエサにするという内容の動画の２分程を子どもと一緒に視聴した。「もし逃げたらこんなにも増えるの？」「卵いっぱい産んでこんなになっちゃうのはダメ。」と目の前の一匹だけではない様子を見るとまた違った意見が出始めた。それでも、「この子は何もしてないからカエルになるまで見ていたい。」「立派に大きくなってほしい。」という意見もありみんなで揺れ動いた気持ちを伝え合うことができた。どちらに全員の意見をまとめることではなく、目の前の命について考え、危険生物といわれる生き物がいることを知ったり、みんなも他の生き物の命を食べて生きていることを知ったり、生きるためには食べないといけないことが分かったりすることができた時間になったように思う。自分たちの気持ち、生き物の気持ち、いろんなことを多面的に考えて、その時々の気持ちを話し合えた大切な時間を過ごすことができた。

省察

園周辺を散歩することで色々な植物や生き物たちの出会いにときめき、その結果、川の生き物を身近に感じることができた。そこから、飼育したい気持ちの育ちや、名前を付けて育てる愛着の育ち。仕掛けを作りたい気持ちになり、図鑑を見ながら作ったり教え合ったりする意欲の育ち。一人一人が自分事として仕掛けを見守り、それぞれの結果の喜びを共有する心の育ち。危険生物について知り、自分の気持ちと友達の気持ちを聞く中で揺れ動く意見を伝える育ち。などがあったように思う。子ども自身が興味をもった生き物をどうしたら捕まえられるかを、上手くいかなかったことから教師と一緒に考え、実践することでより興味は高まり、その生き物について考えたり、気付いたりしたことを友達と共有したりする姿がみられた。特に、ウシガエルの命についての話し合いでは、情報が入るたびに変わっていく気持ちの揺れ動きを伝え合うことができた。また、人間の気持ちだけではなく、ウシガエルに食べられるかもしれない他の生き物の気持ち、食べないと死んでしまうウシガエルの気持ちなど、多面的に考えるきっかけができた。正しい答えがなく、まとまることもない話し合いだが、生き物をとの関わりを通して、深く命について考えるという貴重な経験ができた。

６．研究のまとめ

（１）研究の成果

それぞれの育ち、興味関心による差はあるものの、継続して飼育を続けることで、成長や変化に対する気付きを友達と共有する姿や、名前を付けて呼び、エサをあげるなど、愛着をもち大切そうに見守る姿が見られた。そして、死に対しては特に考えるきっかけとなり、大切にしていた子どもほど、次は死なせたくない思いも強く、そうならない為によく考え、思いを伝え合えていた。生き物を大切にしたいと思える心の育ちは、日々の関わりの積み重ねで徐々に高まっていき、死んで失った時にその大切さに気付くものだと感じた。

身近な生き物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な生き物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちの育ちを感じることができた。

（２）今後の課題

ウシガエルについて何度も話し合った後、子ども達は園庭で見つけたカマキリを飼い始め、カマキリのエサとしてシジミチョウを捕まえて虫かごで捕食できるような環境を整えていた。飼っていたチョウが死んでしまった時は悲しみ、どうするとよかったのか考えていた子ども達であったが、カマキリを主体とした時にはその他の生き物はエサと認識し、そこに悲しみは生まれていなかった。むしろ、カマキリが食べることができ、お腹減っていなくてよかったと喜んでいた。

「生き物を大切にしたい思い」とは、思い入れをする対象によって変化していくものであることがわかった場面であった。その生き物を大切にしたい。そのためにどうしたらいいのかを考えていく経験から、相手の立場になって考えたり、友達の思いに気付いて「こうしたら嬉しいかな？」など行動したり、大切と思える生き物との関わりを通して、友達のことも大切にしたいという気持ちをもち、友達同士への思いやりの姿が増えてくることを願う。

＜引用・参考文献＞

『幼稚園教育要領解説』
平成３０年３月　文部科学省